

# ハルシナイから上流へ⑤

前回は、明治六年に開拓使測量長アメリカ人のワッソン(James R. Wason)一行が、近代的三角測量のために、上川の調査をした時の様子を紹介した。

ワッソン一行が、石狩川を愛別まで溯る時に丸木舟が二度転覆、愛別から下る時に、ビビブト(註・比布川の石狩川との合流点)上流一、二町の所で、一隻の丸木舟が流木に衝突して転覆、次々下ってきた丸木舟が、転覆した丸木舟に衝突して、都合四隻が転覆した。丸木舟時代の上川紀行の中で、管見では、丸木舟転覆の最多記録である。

明治十七年、内務省地理局の高橋不二雄と札幌県地理課の福士成豊は、石狩川水源の石狩岳に上り測量し、北海道の中央高地の詳細を明確にし、明治二十年に『改正北海道全図』を刊行する。この調査で、明治十七年九月六日、丸木舟で石狩川の上流へ溯る時、ワッ

ソン一行と同じビビブト上流のウエマクンベツで、高橋・福士の乗った丸木舟が転覆する。

高橋不二雄は、この調査で描いたスケッチ集『溯礮画帖』(東京大学史料編纂所蔵)の中に、右のウエンマクンベツでの丸木舟の転覆の彩色画を描いている。自筆キャプションは、「ウエンマクンベツニテ乗船転覆ノ図」で、踏査記録の『札幌県巡回日誌』(同前)によると、絵のように丸木舟は舟底を上



にした状態になり、高橋は滑る丸木舟の舟底にようやくまたがり、もう一隻の丸木舟に助けられる。荷物は福士の猟銃をはじめ、これも絵のように全てが流されたのである。しかし、高橋の日誌以外は、幸い全部回収ができた。

丸木舟の転覆で最も有名なのが、文化四年(一八〇七年)に、近藤重蔵の乗った丸木舟が、**掲載図**のレニコロピイラで転覆した件である。レニコロピイラ(re-kor-puyira 名・を持つ・激流)↓「有名な激流」の意味は、その名の通り、ハルシナイから上流では、最も危険な場所であった。近藤は十月十四日、チユクベツブト番屋を出発、石狩川を下ったが、このレニコロピイラで丸木舟が転覆破船し、一〇〇間(約一八〇m)ほど下流に流され、御朱印(朱印を押しした公的文書の敬称)まで濡らすという状況であった(「勤書」)。

前回紹介したワッソン一行の平林通格が記録した、ハルシナイで見た、陸に曳き揚げた丸木舟十三・四隻のうち、岩などに衝突して砕けたのが二・三隻あったというのは、近藤重蔵のよ

近年、旭川のアイヌ語地名で、食料食物を採取できる地名として、神居古潭のハルシナイが記載される例が多い。これは、当連載の⑫でも紹介した、昭和

「春志内(はるしな)。ハルウシナイ(haru-ushinai 食料・多くある・沢)―この沢の奥には、ウバユリやギョウジャニンニクなどの食料植物が群生していたのでこの名がある。」字義通りに訳すと、この通りである。しかし、近隣の自然界に沢山あったであろうウバユリやギョウジャニンニクを、丸木舟の転覆の危険を冒してまでハルシナイに採りに行くことはありえないのである。

「地名は大地に刻まれた歴史である―この言葉通り、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎が記録した、ハルシナイは丸木舟から荷物を背負い上下するところなので、「此処え飯料置処なるが故に号る也。」すなわち、「携帯用食糧」弁当がいつも置いてある川」の意味で、「ハルシナイ(haru-usi-

nai 携帯用食糧)弁当がいつも置いてある・川」との意味だったのである。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します

## 断章 アイヌ語 旭川の地名研究

80

高橋 基

明治17年『溯礮画帖』